

---

# あなたと私、それぞれの事情

R A N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたと私、それぞれの事情

### 【Nコード】

N5322V

### 【作者名】

RAN

### 【あらすじ】

目覚めると、見知らぬ場所におり、横には見知らぬ男性がいた。事故により記憶がなくなってしまった女性は、恋人だという男性の助力により、記憶を取り戻そうとしていく。自分にあるだろう記憶は何なのか、不安を覚えながら。 dノベ転載 しなのさんのついた「診断メーカー小説（まとめ<http://toggetter.com/li/107571>）の後日談を考えて書いてみたものです。

あつたのは揺らぐ水面。

周りは闇。布のようにかぶさつてくる暗黒。

何かをつかみたくて、彼女は手を伸ばす。

水面に触れた時、自分の顔が映った。

彼女は目覚めると、白い部屋にいた。

頭が重くて、ぼんやりとしたまま、視線だけをさまよわせる。

すると横には、彼女の顔を覗き込む男性がいた。

彼女はそれに安心感を覚え、思わず笑顔になった。

すると、目の前の男性も優しく微笑んだ。

そして、そつと彼女の頭をなでた。

彼女はそれが心地よく、また目を閉じた。

今度は辺りは真っ白だった。

どこまでも突き抜けていきそうな果てのない白。

彼女はただ歩いていた。

足裏からの感触は、木の板の上を歩いているような。

ただ、ひんやりとしていた。その空間の空気も、冷えていた。

歩いてても歩いてても先が見えず、途方に暮れて立ち止まった時。

急に足の下の感覚がなくなり、彼女は落下した。

次に目覚めた時も、同じ部屋だった。

勢いよく彼女は体を起こし、辺りをせわしなく見回す。

そして、横には先ほどと同じように男性がいた。

急に飛び起きた彼女を、男性は驚いたように目を見開いて見えた。

男性と視線が合い、彼女の表情は不安そうなものへと変わっていった。

「ここは……どこですか……？ 私はなぜ、ここにいますか……？」

彼女の言葉に、男性の表情は真剣なものへと変わる。

彼女は男性の顔をじっと見つめた。

「やはり、記憶がないのですね……。僕は幸田正信といいます。あなたの名前は、とりあえず便宜上これだけは伝えますね。安藤絵梨といえます。あなたは大きな事故にあわれました。お医者様に聞いた所、生死の境をさまようほどの危険な状態だったので、一時的なもので記憶障害が出るそうです。これに関しては、無理に思い出させたり、ただ今までのことを話しても意味がないので、あなたが記憶を戻すまで、僕がお手伝いをいたします」

一気に説明をされて、絵梨は口を開いて呆けていた。

その反応に、正信は苦笑いを浮かべた。

「まあ、そういう反応になりますよね。とりあえず、あまり色々考えすぎないでください。当座の面倒は僕が見ますから。あなたは、とりあえず記憶が取り戻せるように、健康的に生活していけばいいんです」

そう言うと、正信は絵梨の肩を優しく叩いた。

絵梨は不安そうな視線を正信に向けた。

「でも、あなたが私とどういう関係で、ここまでしてくれるのかわからないと、少し不安です。それも、教えてもらうことはできませんか？」

その言葉に、正信は少し視線をそらして、考え込んだ。

「とりあえず、僕とあなたは恋人同士でした。だから僕は何とかしてあなたを救いたい。これで、不安は解消されましたか？」

笑顔で答えた正信を、絵梨はじっと見つめた。

その答えを確かめるように、瞳の奥を覗き込むように。

自然と体が近づいた。

正信も、その視線から目をそらさずに、じっと見つめた。

少しの間見つめ合い、絵梨は口元を和らげて体を離れた。

「はい。それでは、お世話になります」

その正信は、絵梨も疲れているだろうから、とすぐに帰った。

この部屋には絵梨しかおらず、テレビはあったが、それしかなく、暇をつぶすこともできず、手持ち無沙汰だった。

絵梨はそういう風には感じていなかったが、正信が帰った後、すぐ瞼が重くなり、また眠りについていった。

深い青の中で目を開けた。

周りがぐるぐるとしている。チカチカとまたたくものも混じっていった。

目が痛くてよく見えない。

忙しく動く青の中、必死に目で追おうとして辺りをきよきよろと見回す。

それでも全く見えず、悲しくなって、視界がだんだんと滲んできた。

再び目を開けると、病室だった。

目の端が冷えているのを感じ、手で触れると、冷たい液体の感触がした。

泣いていたのは、現実だった。目覚める前も、夢のような不思議で、それでいてリアルな空間にいた。

あれは何かを表しているのだろうか。

絵梨は再び目を閉じて、あの強い衝撃に触れるのが怖くて、ベッドの脇にある窓のカーテンを少し開け、そこから空を眺め、ベッドに横たわりながらぼんやりとしていた。

そして、いつしかまた目を閉じていた。

瞼にさすような感覚を感じ、絵梨は目を覚ました。

今度は何の夢も見ずに眠っていたようだ。

窓の外はすでに明るかった。朝がきていた。

絵梨はゆっくりと体を起こすと、ちょうど部屋に來た看護師に声をかけられた。

「あら、おはようございます。ご気分はいかがですか？」

「夜中に少し目覚めてしまって、まだ少しだるいです」

柔らかく笑った顔で、看護師に絵梨は返事をした。

「眠くなったら寝てくださいね。あと、寝付けないこととかありましたら言ってください。眠れるように考えてみますから。とにかく、体を休めてくださいね。あ、それはそうと……」

看護師が言うと、手のひらを差し出した。

その手には、携帯電話が握られていた。

絵梨はどういうことかわからず、首をかしげた。

「幸田さんが、あなたに渡してほしいと頼まれていきましたよ。携帯が使える区間は、看板や印がありますので、後で見てください。さ。とりあえず、この病室内は大丈夫ですので」

「あ、はい、ありがとうございます……」

絵梨は戸惑いながら携帯電話を受け取った。

淡い光沢のあるピンクがかかった銀色の、二つ折りのものだった。

確かに周りの様子を見ると、自分の持ち物らしい持ち物はない。

だんだんと持ち物も揃えていかなければいけないのだろうとは、思っていた。

こうしてもらえるのはありがたいことではあるが、同時にやはり心苦しくもあった。

早く記憶を戻して、お世話になってばかりでなく、何か返せるよ

うになりたいたと、絵梨は思っていた。

とりあえず絵梨は、携帯電話を開いて中をいじってみる。すると、着信音が鳴って、絵梨は驚いてしまい、携帯電話を取り落としそうになった。

画面を見ると、メールだった。送信者は正信からだった。

「こんにちは。今日出勤前の朝一番で、看護師さんにこの電話を渡してもらったことをお願いしました。そろそろ届いている頃だといのですが。受け取りましたら、お返事をください。仕事もあつて、なかなか会いに行くことができないので、こうして少しでもあなたとお話がしたいのです。」

メールにはそう書かれていた。

絵梨はさっそく受け取った旨を告げる返事をつつた。

目は覚めたが、他にすることもなかったので、正信からのこうした心遣いは素直に嬉しかった。

「携帯電話わざわざありがとうございます。こんな高価なものまでお世話になってしまつて……。早く記憶を取り戻して、何とかお返しをしたいと思います。まだ携帯を受け取ったばかりですが、メールは確認いたしました。よければたまにお話してください。幸田さんも、都合のいい時間帯教えていただければ、私からもメールさせていただきます。」

返事をした。

メールはまた来るだろうか。それを待って、携帯電話を握りしめて、絵梨の心臓はより大きく、速く脈打っていた。

また着信音が鳴る。

絵梨は慌てて携帯電話を開いた。

もちろん正信からである。

絵梨の感覚は、高鳴る心臓の音で支配されているほどだった。そして、メールを見る。

「ちょうどよかったです。もしかしたら電話はつながりにくいかも  
しませんが、メールはくだされば必ず見ますので。時間帯はいつ  
でも気にせずに。何もない部屋でつまらないとは思いますが。今度  
行った時に、本など他に必要なものを買ってきましょう。」

1行空けて、文章が続いていた。

「一日一回、お話をメールしようと思います。それを読んで、気が  
紛らわせてくれたら、と思います。」

そこで文章は終わっていた。

「楽しみに、していますね。」

そう返して、絵梨は携帯電話を閉じた。

また次の日。

リハビリで運動をしたり、検査をする以外は何もすることがなく、絵梨は、午前中はベッドの上でぼんやりと窓の外を見ていた。

個室なので、特に誰に会うこともないためだ。

別に体に異常はないから、外に出る許可も出ているのだが、今日  
は出る気分にはならなかった。

出なければ、とは思うのだが。まだ時間がかかりそうだった。

それも、正信さんに相談しようか、などと絵梨は考えていた。

ふと、正信のことについても気になることがあった。

この個室の病室といい、正信はどういう仕事をしているのだろう。  
身なりも上品で上等なスーツを着ていたから、もしかしたらお金  
持ちなのかもしれない。

自分はどうやってそんな人と知り合ったのだろうか。

全て含めて、正信に聞いてみようと思った。

メールではうまくはぐらかされそうなので、この数少ない会える  
チャンスを活かしたいと絵梨は考えていた。

その面会時間も、どれほど取れるのかわからないが。

昼食を食べ終わった後、携帯メールの着信音が鳴った。

とりあえず電話着信とメールの着信音を分けるといふ設定をして  
いた。

画面を開くと、正信からのものだった。

この携帯の連絡先は正信しか知らないのだから、当たり前だが。  
それでも絵梨は嬉しくなった。

「こんにちは。お昼ご飯中でしたらすみません。病院のお食事はい  
かがでしょうか？ 今日時間は時間がありそうなので、夕方頃にお伺い

いたします。お土産持っていきますので。」

お土産は、たぶんこのあいだ言っていた本だろう、と絵梨は想像しながら、微笑んでいた。

早く正信が来ないかと、楽しみにして時間を過ごしていた。

とりあえず、聞きたいことをメモにしていた。

何気なくしていたが、その日のやることをこうしてメモにしていた気がする。

こういう何気ない行動も、記憶を取り戻す一歩かもしれない。

絵梨は、この行動を大事にしようと思った。

このメモは、必要なくなった後でも、とっておくことにした。

窓から差す日もかげり、部屋が暗くなってきたので、そろそろ電気をつけようかと思い、スイッチのある入り口側を見た。すると、ドアを軽く叩く二、三回ノックする音がした。

絵梨の心は浮き立つ。

「どっぞ」

声にも思わず嬉しさが出てしまった。少し高めの声で絵梨は言った。

そろっと静かに引き戸の扉が横に動き、そこから顔をひよいとのぞかせたのは、正信だった。

絵梨の姿を見て、笑顔を見せる。

「こんにちは。お元気でしたか？」

中に入り、後ろ手で扉を閉める。

その動作も無駄がなく、とても自然だった。

その片手には、少し大きめの袋を抱えているのに。

「……はい、おかげさまで」

絵梨はその動作を改めてじっくりと見ながら、笑顔で答えた。しかし正信は、絵梨の言葉に、少し笑顔を上げさせた。

その意味は何なのだろう。絵梨は、正信の行動の一つ一つの意味が気になった。

絵梨が見つめる視線を正信は感じ取り、困ったような笑顔で首をかしげた。

「電気つきますね」

そう言うと、スイッチに手を伸ばす。

部屋の色が人工的な白になる。

そして慣れたように椅子を絵梨のベッドの側に引き寄せて、座った。

「これ、メールで言ってたお土産です」

正信はそう言うと、抱えていた紙袋を絵梨に両手で手渡した。

「何でしょう?」

絵梨は嬉しそうに笑顔で、同じように両手で紙袋を受け取った。

「あなたが好きな本を買ってきました」

絵梨は、何だかその言葉に違和感を覚えたが、すぐには思いつかなかったもので、気にしないことにした。

「何でしょう、楽しみです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5322v/>

---

あなたと私、それぞれの事情

2011年8月17日22時26分発行